

伊奈波神社境内の句碑

真理子

神社境内にはたくさん石碑があり、並び立つ燈籠や手水鉢、鳥居などにも奉納者や年月が刻まれています。これらの石造物のうち、大鳥居の脇、松尾神社の建つ池のそばに、二基の句碑があることにお気づきの人も多いでしょう。今回はこの句碑について取り上げます。

池の手前の小さな木立の中には、獅子の台座上に高さ九二センチの円柱形の石碑があります。正面に大きく彫られているのは「芭蕉翁」の三文字です。向かって右側には「安永六丁酉年冬十月十二日造立」。裏面は風化が進んでいるものの「山・や・無(む)・瓜・はせ」などがかなりはつきり判読でき、それ以外にも文字の一部が見てとれます。碑にはいくつもの大きな亀裂があり、頂部の周縁や句の文字部分では石の表面がかなり欠け落ちてしまっていますが、全

体はすっきりした姿で、身体を丸めて台座になつてゐる獅子も愛らしく感じられます。表面につやがあるのは、これ以上の破損を防ぐために平成十五年の修理で樹脂を使ったからでしょう。裏面に刻まれているのは、芭蕉が岐阜町を訪れた貞享五年(一六八八)に詠まれた俳句です。このときの芭蕉の真跡が今も残されており、そこには次のように書かれています。

「落梧何がしのまねきに応じて、いなばの山の松の下涼(すずみ)して、長途の愁(うれい)をなぐさむほどに」

山かけや身を養む瓜ばたけ ばせを
らくご
石井の水にあらふかたびら
貞享五年
句碑に読める文字は、この「山かけや身を養(やしなわ)む瓜ばたけ」と「ばせを(芭蕉)」

の一部だったわけですが、それに続く句の作者である「らくご」は、本町(現在の岐阜市本町二丁目)の豊かな呉服商で芭蕉を岐阜に招いた中心人物、安川落梧です。芭蕉の五七五の句に落梧が七七

れをいやしたいものだ、落梧のもてなしへの感謝の気持ちを含めて詠んだのです。必ずしも眼前に瓜畑があったとは限らず、美濃の名産の真桑瓜を意識しての一句でしょう。それに対して



落梧は「旅に汚れた帷子(かたびら)を清らかな水で洗つてお着せします」と、主人役としての喜びを込めて続けました。この場所がどこであったかは確定されていませんが、伊奈波神社のそばに建つ大泉寺では、浄土院で開かれた句会で詠んだものと言ひ伝えられていました。浄土院は現存しませんが、かつては大泉寺の近くにあって、たびたび句会の場となつた寺院でした。芭蕉は落梧に案内されて伊奈波神社に詣でたのち、浄土院での歓迎の句会に主客として参加して、二人でこの連句を作ったのかもしれない。

落梧は元禄四年(一六九一)五月十二日に四十才の若さで没しました(墓は伊奈波の法円寺にあります)。芭蕉も元禄七年十月十二日に亡くなります。その八十三年後の安永六年(一七七七)の芭蕉命日に、「芭蕉翁」の句碑が建てられたのでした。このときには記念の句会や句集があったに違いありませんが、それらは残されておらず、句碑にも建立者名は刻まれていませんので、誰がどんな事情で句碑

を建てたか今ではわかりません。しかし芭蕉の真跡と句碑の文字を比べると、微妙に筆さばきは異なるものの、文字づかいや配置はそのままで。恐らく、真跡をなるべく忠実に写して句碑に刻む文字を書いたのだろうと想像されます。

芭蕉の句碑そばの池のほとりには芭蕉の弟子、各務支考の句碑があり、高さ一六八センチの石に「山の端の月見や岐阜は十三夜 見龍」と刻まれています。一部に生えた苔が碑面に変化を生んでおり、全体の姿はまるで人が少し背を丸めて立っているようです。

支考(一六六五〜一七三二)は美濃国山県郡北野村西山(現在は岐阜市)に生まれ、晩年の芭蕉に入門して俳諧を学びました。芭蕉の弟子を代表する一人として門下を育てました。獅子老人・蓮二など多くの号をのり、句碑にある「見龍」もその号の一つです。句中の「十三夜」は旧暦九月十三日の月を見る行事で、八月十五日の仲秋の名月に対して「栗名月」「後の月見」など

と呼ばれました。今では仲秋の名月だけが愛でられますが、かつては八月・九月のどちらか片方だけの月見をするのは片月見でよくないとされてきたもので。旧暦は月の満ち欠けをもとにしていましたから、毎月十五夜は満月、十三夜は少し欠けた月が昇ります。十三夜の月の出は夕暮れよりも早く、月が沈む頃には地平線より少し高い位置で目にするのができます。金華山のふもとにある岐阜町では、十三夜の月は日没過ぎに山の端に姿を見せるわけです。「月見や岐阜は十三夜」は、この岐阜町の地勢が詠み込まれているの

ものでした。昭和十年に発行された『岐陽雅人伝』には、支考から弟子の井上童平にあてた九月十二日付けの手紙が引用されています。それによると、「このところ腹痛がおこり、浄土院での句会にはとても出席できそうもないので、この句を送ります」として「山の端の…」の句が書かれています。支考自身は出席できなかったものの、童平たちはこの句に続けて連句を詠み継ぎました。

実はこの句も、浄土院で開かれた句会のために支考が詠んだ

